

滿洲俳句の季語についての一考察

—— 『樹氷』 における「北滿季語解」を中心に

呉 衛峰

東北公益文科大学総合研究論集第四十五号 抜刷

二〇二三年七月三十一日発行

満洲俳句の季語についての一考察

——『樹氷』における「北満季語解」を中心に

呉 衛峰

はじめに

「満洲俳句」を含む海外における日本人の俳句は、高浜虚子の有季定型の流れを汲む場合、日本国内の気候風土と異なる地域で句を詠むとき、季語（虚子は「季題」を使う）が当然大きな問題となる。昭和初期、朝鮮と台湾という植民地（外地）をもつ日本では俳句が実質的に「国民詩」になっており、外地およびヨーロッパへ俳句文学を広げることに関心な虚子は「熱帯季語論」を発表し、様々な議論を呼び起こした。渡仏（1936）の途中シンガポールに滞在した時の感想として、虚子は四季の区別がほとんどない熱帯の季語を「熱帯季題」として歳時記の「夏」に編入することを主張する。その後それを補足する形で、寒帯（北海道と樺太を意識しての発言か）特有のものは「冬」の季に入れることを主張し、台湾歳時記など様々な歳時記が出ては良いが、あくまでも「内地の歳時記を宗としなければならぬ」という考えを示していた。¹

虚子が「熱帯季語論」を発表した時に台湾ではすでに日本人による『台湾歳時記』（1900）²が存在し、虚子が渡仏の帰りに台湾に寄った時、台湾駐在の日本人俳人に亜熱帯の台湾にもしっかりと四季が存在すると切々と訴えられた

(1) 満洲俳句の季語についての一考察 ——『樹氷』における「北満季語解」を中心に

というエピソードもあった。

一方、旧満洲（中国東北部）における日本人の経営が日露戦争終結直後の満鉄の創設がきっかけに始まり、傀儡国家満洲国（中国では「偽満」と呼ばれる）の成立によって、ロシア人が経営していたハルビンを含めて旧満洲全体を支配下に置いた。俳句の季という意味では、北満のハルビンは亜寒帯に属し、南満の大連は温暖気候圏にあるので、一括りで「満洲季語」と言っても、まともにくい所がある。

本稿は右記の種類の満洲季語から国際都市ハルビンを中心とする北満季語に絞り、俳誌「韃靼」の年刊句集『樹氷』を通して考察して、その特徴と意義を探ってみたいものである。

一、北満季語の春

ハルビンの俳句事情については、小沼正俊編『韃靼——大陸俳句の青春と軌跡』⁴に詳しい。ロシア人がつくったこの町は白系ロシア人、中国人、ユダヤ人、そして少数の日本人から構成されていた。飯田蛇笏の弟子にあたる佐々木有風が商社経営という職業のかたわら、満洲国成立以前からハルビンの俳句に関わることになり、満洲国成立後に俳誌「韃靼」の主宰をつとめていた。

季語のみに焦点を当てて考える場合、1938年から1940年までの俳誌「韃靼」年刊句集として編纂された『樹氷』（1941年4月）の「春」「夏」「秋」「冬」四季選句のそれぞれの後ろにある「北満季語解」が非常に有益な資料である。⁵

春の季語には、建国節（満洲国建国日、3月1日）、榆の花、清明節（三月節、「満人」の墓参りの日、4月上旬）、猫柳祭（ロシア人の節句、4月21日）、バスハ（バスカ・復活祭、4月下旬）、瑩まつり（ラードニッツァ・展墓祭、

5月上旬、ロシア人の墓まつり)、防塵布(ロシア人女性が用いる風の埃を防ぐヴェール)、嬢嬢祭(にやんにやん祭・娘娘廟会、道教に由来する中国人の祭り)、良縁・裕福・出世・長寿等を祈願する)、志士祭(日露戦争直前にロシアの東清鉄道を破壊しようとして捕まり、ハルビン郊外でロシア軍によって銃殺された日本人を記念する日、4月21日)となっている。最初のもは植民地経営のシンボルとして位置づけられ、最後の一つは十九世紀的帝国主義の倫理観が伺えるほか、その他はハルビンの国際色を強調するものであった。
例として以下数句を掲げる。

○榆の花

日かげれば風をつめたし榆の花

山田岳秋

○清明節

寒食の一日静かに書に溺る

森川遊子

○バスハ

バスハ来ととの曇りせし地平かな

佐々木有風

○嬢嬢祭

娘々祭黄塵の底馬車這へり

上西行乞

気候的にも日本本土(内地)との違いを示す意識からであろうか、「黄塵」等の大陸の季節的特徴を際立たせるものが多い。清明節の子季語として「寒食」を使ったのは、作者の漢文教養の現れである。

二、北満季語の夏

ハルビンの短い夏にも蚊や虻が発生し、気温は札幌のそれに近い。『樹氷』の季語解に採録されたものを掲げると、榆の実、トロイツア（三位一体祭、6月中旬）、青草敷く、ブザー（パン屑を発酵させて作られた、だが非常に複雑な味をもつ清涼飲料水」と解釈されているので、ロシア人が作ったものである）、垣剪む（籬切る・籬手入、ロシア人が垣の手入れをするそうである）、ウズバーニエ（聖母昇天祭、8月28日）、ピンテール、夜来香（晚香玉、ハルビンに限られる花ではない）、蒙古桜（東郷草・万年草・不死の花・ベス、スメルチイ、多年生草本）、オボ祭（廟市、旧暦6月、砂漠草原地域のお祭り）、廟法会（旧暦6月前半）などがある。日本人にとって大陸的で、エキゾチックなものが選ばれている。

例として数句を掲げる。

○榆の実

榆の実をかぶり惜春の歩を運ぶ

青木郊水

○トロイツア

月おぼろなりトロイツアの櫛を伐る

荒毛達郎

○青草敷く

キネマ愉し青草の匂ふ夜の

佐藤青水草

○ブザー

ブザー飲みてあれば旅愁に似しものを

有賀淡水

○垣剪む

垣剪みつ、はなしつ、老神父

佐藤青水草

○夜来香

法帖の徽を惜しめば夜来香

佐藤青水草

○蒙古桜

不死の花家苞にして雲の峯

中川宋淵

「垣剪み」はまた平和裏にあるハルビンの微笑ましい日常の一齣である。今から見れば、嵐の前のしばしの静寂と感じられよう。夜来香はそもそも中国南部に原産する花で後に全土に広がったものであるが、言葉自体当時は若干エロチックなニュアンスを醸し出す。句はこの花が李香蘭の歌で「夜来香（イェライシヤン）」として有名になる前であった。

三、北満季語の秋

「北満の秋は賢明でしかも美貌ではあるが、あまりにも短命である」と『樹氷』に書かれている。東北部をふくめて、中国の北部は春と秋が短い。「北満季語解」における秋の季語を掲げると、聖母降臨祭（9月21日）、てんとうむし（瓢虫）、鉢入れ（ロシア人などは、夏の間屋外に出されていた鉢を霜害から守るべく屋内に入れなければならないという）、庭木埋む（寒気に弱い植物を浅い溝に倒伏させて土で覆うという防寒措置）、草掻き（現地中国人が枯れた草を冬季の燃料としてかき集めることである）、終航（終航船、スナガリこと松花江および黒竜江は冬季は凍結するので、1

0月の下旬あたりに終航する)、博文忌(10月26日、伊藤博文が1909年ハルピンの駅で暗殺されたことの記念)、孔子祭(祀孔、旧暦8月上丁日つまり最初のひのこの日に孔子廟で行われる。満洲国には春の祀孔もあり、旧暦2月上丁日)などがある。

例句を以下に掲げる。

○てんとうむし

日焦げの娘てんとう虫とぶヴェランダに

佐々木有風

○草掻き

哨兵を恐れ少年草を掻く

竹崎志水

○終航

終航船巨き夕陽を率て航けり

有賀淡水

○博文忌

蒼天の冷え地に迫り博文忌

竹崎志水

○孔子祭

虫の野をかへり祀孔の楽とあふ

久保木信也

「草掻き」の句で少年はなぜ哨兵を恐れるのだろうか、日本人の哨兵か満洲軍の哨兵かと定かでないが、「孔子祭」と合わせて、「王道楽土」「五族協和」の裏にある真実が露呈する一句となるであろう。「博文忌」の句は日清・日露戦争以降におけるこの地の「きな臭さ」を顕わにしている。

四、北満季語の冬

北満季語のもっとも特徴的な部分とは言うまでもなく冬の部である。虚子の主張に従えば、「熱帯季題」に対する「寒帯季題」の問題に相当し、一般（内地）の歳時記の冬の題に「寒帯」を設けることであろうか。実際、「北満季語解」における冬の季語解は、春・夏・秋三季のそれぞれの二倍ほどの分量を占めており、10月から翌年の3月までは長い冬である。

まず、前の三季と同じように、収録され解説された季語を掲げる。封江（北満の河の凍結が11月上旬あたり）、トルストイ忌（杜翁忌、11月20日）、寒夕焼（凍結した大地の果てや、冬木の上を流れる雲を染める夕焼けに「見逃し難い情緒とペーソスがある」と言う）、聖ニコライ祭（12月19日）、氷紋（極寒の中の窓ガラスに現れる現象）、息凍つ（外を暫く歩くと、息が髭や襟に白く凍り付く現象）、換気（冬ごもりの中で、健康のために換気する必要がある）、凍鐘（鐘凍つ、ロシア正教の寺院の鐘が北風の中の視覚的および聴覚的イメージ）、マフ（マッフ、マフタ、ロシア婦人のハンドバッグ兼保温具）、造花（造花売る、半年にわたる冬の室内には、造花の装飾が必要になる）、大豆馬車（大豆は旧満洲のおもな農産物で、大豆馬車が駅に集まってくる）、ウォッカ（火酒）、帆かけ櫓（アイスヨット、凍つた川を走るヨットのこと）、かまど祭（祭灶、旧暦12月23日）、元宵節（燈節・高脚踊り、旧暦1月15日）、洗礼祭（聖水式、1月19日）、タチヤナ祭（大学祭、1月25日）、ロシア人の祭日）、ドストエフスキー忌（1月28日）、プーシキン忌（1月29日）、万寿節（2月6日、満洲国皇帝溥儀の誕生日）、春遠し（北満の実感）、凍てゆるむ（凍解のプロローグ）と言う）、糖糕児（タンゴール、山査子の串刺しに溶かした砂糖を掛けて固まらせたお菓子）などがある。

例句を掲げよう。

○封江

キタイスカヤの宵美しく封江期

竹崎志水

○トルストイ忌

杜翁忌や殺戮絶ゆる時ぞなき

山田岳秋

○寒夕焼

寒夕焼塔層々の鐘ならず

桂 秀草

○息凍つ

けだもの、どれも頭を垂れ息凍てぬ

佐藤青水草

○凍鐘

鐘凍てぬ子がり妹がり帰るべく

高崎草朗

凍鐘にさそはれ生る、詩情かも

竹崎志水

凍鐘に物乞ひゐしも十字切る

竹崎道子

○造花

高気圧窓に造花を容れしより

野嶋島人

「封江」の句にあるキタイスカヤはロシア語「中国人（町）」の意味で、現在は「中央大街」という名前になっており、ハルビン最大の繁華街である。「トルストイ忌」の句は、トルストイの非暴力主義から来ているであろう。「凍鐘」の題

では三つの句を掲げたが、高崎草朗の句は日常生活の生き生きとした一齣を切り取ったようなものである。竹崎志水の句は写生から離れ、具体化できない胸中の詩情を詠んでいる。竹崎道子の句は社会の不平等を一人の敬虔な物乞いから捕えている。

○かまど祭

灶祭る夜の凄艶を婦に見たり

森川遊子

○元宵節

残雪を渉る高脚相もつれ

高崎草朗

○洗礼祭

接吻す氷十字柱炎えにけり

高崎草朗

○万寿節

神廟の凍ておごそかに万寿節

竹崎志水

○春遠し

春遠し駱駝疎懶の眸を高く

佐藤青水草

○凍てゆるむ

行軍す墓多き野の凍てゆらむ

山田岳秋

「かまど祭」と「元宵節」は中国の民間風俗を写生した句であるが、前者は婦人の「凄艶」という色彩感を視覚的しかも心理的に捕捉し、後者は「高脚（たけうま）」のもつれというお節句の賑やかさの中にユーモアに富む一齣を切り

取った。「万寿節」の句は我々に満洲国のハルビンという歴史的背景を印象付ける。「春遠し」は駱駝の眸の表情をとらえ、素晴らしい写生句である。「凍てゆるむ」は、この「満洲浪漫」の大地の現実をしつかりと我々の眼に焼き付けさせる。

おわりに

日中戦争がはじまってから、「捕虜を斬るキラリキラリと水光る」のような恐ろしい「新興俳句」も詠まれていたが、満洲地域は抗日ゲリラとの戦闘を除いて、在満俳人たちはほかの地域と比べてかなり平穏な生活を送っていた。

その生活が満洲季語に反映すると、「匪賊」（抗日ゲリラと山賊の両方を指すか）などの言葉もあったが、おおかた満洲浪漫色に染められたホトトギス派の「花鳥諷詠」的写生であった。とくに本稿で扱っているハルビンの俳句は、各季語の例句に見られるように、ロシア人・中国人（満人）のエキゾチックな風習が多く詠まれている。ロシア語を勉強し、ロシア文学を耽読していた青年俳人もいたので、ロシア人の生活・宗教等に多大な関心が寄せられていた。

純粹に文学の視点から見れば、本国の歳時記にない北満季語は実に新鮮で面白く、また、極寒地域の気候がもたらした新鮮な材料も作句の刺激になったであろう。氷結した万物から詩情を見出し、本国では出会えない句を詠めている。

一方、一部の社会性の強い句には、弱者としての中国人（満人）やロシア人の乞食の姿が見えてくる。哨兵を恐れる少年が氷山の一角であったろう。そこから「王道楽土」が崩れ始め、ハルビンの生活もいずれひっくり返るのである。

北満季語は、佐々木有風が「韃靼」に書いたように、「吾々は白髪染めで染めた頭髪が、自然の黒髪の如く美しくないといふ事実を考へて見ねばならぬ。自然の頭髪は濃黒なる毛髪、淡黒のもの、赭味を味びた毛などの雑多の色の調和

があるが故に、単一な黒さ以外の何物でもない白髪染めの頭髮よりも美しいのだといふ事実を考へて見ねばならぬ。」⁷ というのである。

日本本土で考えても、虚子が「宗としなければならぬ」関東関西圏で培われた俳句の歳時記が、北海道と沖縄をさておき、東北と九州ではすでに数週間の季節的ズレが生じており、虚子が守っていた子規以来の自然人事の「写生」に不都合を来たしている。全国統一の俳句歳時記は、結果的に国民国家の文化装置になっている。

シンガポールのような熱帯はいざ知らず、旧満洲、とりわけハルビンを中心とする北満の気候は前出のように、冬の比重が非常に大きいのが、やはり四季の区別があり、日本の関東関西圏と異なる季語で句が詠めるのは明白な事実であろう。現在俳句は国境を越えて、様々な国で詠まれているが、何が俳句かという基準もまちまちである。季語を必須とするタイプの国際俳句には、北満季語は、「植民地文化」の産物という時代背景をしっかりと認識した上、文学的には貴重な遺産になるのではないかと考えられる。

本稿はまだ俳誌「韃靼」三年分に見られる北満季語を検討したに過ぎず、これからはその他の旧満洲俳誌を調べ、各々の季語の特徴を考察し、比較してみたいと思う。

注…

¹ 「熱帯季題小論」、初出…大阪毎日新聞、4月9日。高浜虚子『渡仏日記』、改造社、1936年8月、四〇二～四〇五頁。「熱帯季題小論補遺」、「ホトトギス」四八一号、1936年9月、一～三頁。

² 小林里平『台湾歳時記』、政教社、1900年6月。

³ 「ホトトギス」五六〇号、1943年4月、高浜虚子「熱帯季題について」、十七頁。

4 小沼正俊編『韃靼——大陸俳句の青春と軌跡』、西三語学研究室、1988年12月。

5 『樹氷——自昭和十三年度至昭和十五年度韃靼年刊句集』、満洲国立大学哈爾濱黒水会、1941年4月。「北満季語解」…春、三五〜四二頁。夏、九一〜九六頁。秋、一二七〜一三三頁。冬、一八一〜一九五頁。

6 川上大『戦争と俳句』、創風社出版、2020年11月、二二頁。

7 『樹氷』、佐々木有風『東経北緯』の辞」、六頁。初出は「韃靼」第三卷第十一号。